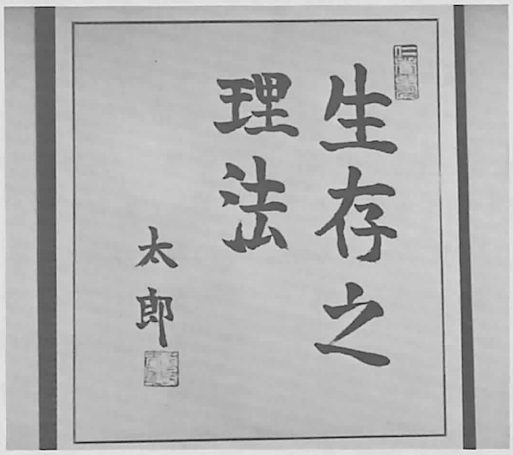
生存科学研究所ニュース

Vol.4. No.1. 1989.1.10発行



目　次

●巻頭言「科学と人間性」　小西新兵衛 …1
●茅誠司理事長に捧げる弔辞……2
●第42回生存科学研究会
渡辺　慧先生の御講演「生存について」……3
●生存科学ビューポイント「医療のRationingについて」……6
●エッセイズ・キュート　「貧乏」からは脱した？ 7
●維持会員だより……8
●ハーバード大学公衆衛生大学院武見講座活動報告10
●ニュース・オブ・ニュース……10
●公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース……11
●告知板……13
●編集後記……14

発行：財団法人 生存科学研究所
〒104 東京都中央区銀座4-5-1
聖書館ビル303
電 話 03-563-3518

●巻頭言

科学と人間性

武田薬品工業株式会社取締役会長・生存科学研究所顧問　小西新兵衛

今月の７月１、２日に東京大学山上会館で、第三回武見国際シンポジウムが開催された。美しく格調の高い会場で、開原成允先生の至れり尽せりの取りしきりは見事であった。充実した講演、これに対する真剣な討論、周囲の深い木立と会場の熱気は素晴らしい対照をつくりだしていた。

開発途上国への国際保健医療協力というテーマが時期を得たものであったが、この大規模ではないが真珠のように光った会合が生みだされたのは、やはりなんといっても武見太郎先生の生存の理法という、人間にたいする愛情が脈々として滅しないからであろうと感じた。

毎号の『生存科学研究所ニュース』の表紙の顔である「生存之理法」という言葉は難解だと思う。私は残念ながら武見先生のご存命中に直接この言葉の意味を承る機会を逸した。生存科学研究所編の『生存科学への道』という書物の中の「生存科学の基礎としての生存の理法」という先生の晩年の論文を読んでも、私のごとき単細胞的な人間が簡単に理解できるような字典的な説明は見あたらない。表現が武見流でかなりむづかしいこの論文を呻吟しながら読んでいくと、「人間生存の理法というのは、生存科学の基礎として提案したものであって、一部は哲学的な理解であり、一部は科学であったわけである。われわれの生存の理法において重要なことは、物質と生命と心、精神という連続的全進化の段階の最後の人類形成段階を特色づける決定的要素は何かということになるが、これは非常に困難なことで、具体的に解明するに至っていない。究極において、人間らしい人間になるにはどのような状態がよいかというと、単なる動物的な存在ではなく、自由と自己責任とをもった人間的存在でなければならない。自由と責任という考え方から人間の存在を考え、それを一つの科学としようというところに生存科学を考えたわけであり、出発点は生存の理法にあったわけである。」と述べられている。生存の理法の端的な定義は見あたらないが、この言葉は自然科学的であり哲学的である。

先生は理研で仁科芳雄博士の許で物理学を修められた自然科学者であると同時に大変人間臭かった。表紙の顔である色紙の「生存之理法」の書は自然科学と人間性、こういう先生のご性格がにじみでた文字であると思う。

大手術後すっかり元気になられ、ごひいきの築地の吉兆で夕食をさしあげた際、その以前と変わらぬご健啖ぶりに感嘆した先生が、５年前の昭和58年９月ホテルオークラでのある会社のパーティーでお目にかかったら、すっかり痩せてしまわれて顔色がよくないのに愕然とした。先生は私を隣りの椅子に座らせて、『小西さん、来年はいよいよ財団も設立し第一回の国際シンポジウムを東京で開催することになるから、貴方にもよろしくお願いいたしたい』と言われた。武見先生はかなりの人から傍若無人のように見られていたよう

であるが、やはり堅い明治の人らしく、後輩の私に丁重に依頼された。私は即座に承知しましたと申し上げた。先生はうれしそうに笑みをうかべておられた。シンポジウム第一日目の夕方、懇親会に出席してビールを飲みながらこんなことを考え、牟田口氏の乾杯の音頭に唱和して科学と人間性を基盤として武見国際シンポジウムのますますの発展を祈念した。

茅誠司理事長に捧げる弔辞

生存科学研究所副理事長　熊谷洋

去る11月9日、生存科学研究所理事長茅誠司先生が御逝去されました。

先生の生存科学研究所に対する御尽力と御指導に深く感謝し、先生の御冥福をお祈りしながら、謹んで、先生の御霊前に生存科学研究推進に対する私共の覚悟を申し述べます。

先生が、昭和58年の年の暮れ故武見太郎氏から、その果し切れなかった最後の夢と仕事をよろしく頼むと、亡くなる数日前に言われ、先生はその手を握って約束されたのだと、その重さを噛みしめる様に何度もお話しされるのを伺いました。

そしてそれは、先生が云われてました通り極めて困難なものでした。あの武見太郎氏の先の先迄見通した広汎深遠な、そして難解な表現を持った実践の哲理は、正に今後にその展開を求められるべきものであり、武見氏自身が身を挺して工夫と思索を最後の日まで30年以上も重ね続けたものでありました。又、その研究の為の組織も、その頃は未だ、武見太郎氏のご存命を前提とした公益信託生存科学研究基金であって、氏を欠いては募金も困難となる為、急遽之に財団を併立させようと急いで準備にかかっていた大きな転換の状態であったからです。でもだからこそ、武見氏は無理を承知で、最も心を許す友である先生に、この必死の思いを託したものであったに違いありません。

こうした困難な新しいお仕事が、さなきだに超繁忙の先生の日程に加わりました。先生に託されましたこの仕事は、残された問題からも、又残されたものの能力からも、この4年間毎日毎日が試行錯誤の連続と、且何よりも、全参加者の、新しい合意の形成の為の、忍耐強い努力の継続の中でしか展開されない様なものであり、ご自身の手塩にかけた多くの財団で全くお時間のない先生には誠にご迷惑なものでありました。

でも先生は、吾々の勝手なお願いに対し、一度も断わられた事もなく、どんなにご無理でも時間を造り、とことん話を聞いて下さいました。そしてあのいつも湛えておられた温顔の中に、犯し難い威厳をこめて、きっちりと纏めて下さいました。更に誰もやらない苦しかった募金も、いつも先頭に立って下さったのも先生でした。あのお齢で、そしてお痛めになった腰を90度に曲げられたまゝ、杖をついて、それこそ雨が降ろうが、雪が積もろうが、約束された日時に、どんな事があっても、お止めしてもご出馬下さった、誠に神々

しい迄の責任感と使命感に満々た清冽なお姿は、今も眼底に焼付いています。

お身体の不自由の度が高まり、お宅や病院へご報告に参りまして、目を瞑っておられるので、小声でご報告し、そっと帰ろうとすると必ずパッと目を開かれ、よかったですね、有難うお願いしますよと声をかけられる時のあの温顔は、もうすべてを包み込んだ神のものでした。そして先生は先生の天国へと旅立たれました。あの先生のお好きな讃美歌は正に先生の一生を貫いた歌でした。

私共は、この、先生のご遺志と、残されました有形無形の教えを語り継ぎ、今後一層の努力を重ね、武見太郎氏から茅先生へと間違いなく引き継がれた巨大なそして高貴な精神を守り展開し続けて行かねばならないと覚悟を新たにしております。

先生本当に有難う存じました。どうか安らかにお休み下さい。

昭和63年12月3日

●第42回生存科学研究会ー「生存の質」シルーズIV

渡辺　慧先生の御講演「生存について」

11月19日午後2時から経団連会館で開催された第42回生存科学研究会において、ハワイ大学名誉教授渡辺慧先生から、「生存について」と題した講演があった。その概要は以下のとおりである。

＊　＊　＊　＊

本日は武見先生が提唱された「生存の理法」について考えてみたい。「生存」は簡単な言葉のようだが、実はいろいろな意味が含まれているように思う。「生命」に近い言葉であるが、英語では“survival”で生き残り、生残という意味になる。

生命が重要な価値であることはいうまでもないことで、キリスト教でも仏教でも殺してはならないと説いている。しかしキリスト教の場合は人を殺してはならないのであって、仏教では「殺生」といって、生きているものは殺してはならないことになっている。ただジャイナ教の生き物はすべて殺してはならないということとは一線を画している。他の宗教においても、たいがいの価値は何らかの意味で生命の尊さとつながっていると思う。

それは我々が子供の時から教えられたということもあるが、どうも生まれた時から持っているのではないかと思う。従って生命は尊いということは誰にでもあることであって、倫理観の根本にあるものだと思う。

ところが最近の人間の状況をみると、生命はそんなに尊いものかと疑問が生じてくるようになってきた。DNAは物質としてみれば非常に恐いもので、状況されよければ限り無く増えてしまうものである。例えばイナゴが空を真っ暗にするほど発生することもあるし、家の中のゴキブリはいくらやっても退治できない。私がこのように考えていたら、神経学の先生が私に「お前は物理学者だ。算術なんかは生命に役に立たないものである。」と注意して下さった。その意味は、梅毒等で抗生物質に対抗するものが出てくるという話を伺い、それではDNAが変わるのかと質問したところ、「どんなコロニーでも、同じスピーシスの生物であっても、その中に抵抗力の違うもの

が沢山ある。その抵抗力の強いものが居残るだけで、抵抗力の弱いものを抗生物質が殺してしまう。その残った小さいものが全部一様に広がってしまって、１＋１が２になるような物理学や数理学の算術を頭に思ってはとんでもない。」ということであった。すなわち、いくら殺してもバリエーションのちょっと違ったものが全部を占領してしまう。それが生物であるということは、DNAの恐さを意味している。

10年以上も経っているかも知れないが、ローマクラブの報告では「これ以上の人口増加をこの地球では維持できないので、人口増加は諸悪の源泉である」と述べている。それは誠にその通りで、公害も人口が多いから発生するので、人口が現在の１／10ぐらいになれば公害を取り除くことも簡単であろう。また、戦争という人間の最も大きな罪悪の原因の一つは、人口問題であると思う。日本やドイツが他国を侵略していったのは、人口が増加し生活圏が不足したためである。したがって、人口増加が戦争の原因になることは、日本人とドイツ人は実感としてよく理解できる。

だから、人間が増え過ぎるとどうしたらよいのかよくわからないのが現状であるといえる。皆様に関係の深い医学を例にとれば、医学は治した方がよい、死ななければよいということで生命を守ることに傾倒しているが、一方では人間が増え過ぎて困っている。医学のジレンマというか、生命を大切にすることはいいのだが、生きてさえいればよいという生命ではどうも困るわけである。

もう少し簡単な例をあげると、鯨の問題がある。欧米、特に英国では鯨を殺すべきでないと盛んに主張している。我々は人間だから、人間を殺してはいけないということは誰にでも考えつく。もう少し広い生命にまでいくと、いろいろな文化の精神によって違うわけだが、欧米では鯨は人間に近い高等な動物であり、それを殺すのは可哀そうだし恐ろしいことであるという感情が非常に深い。死に絶えては困る、その種を絶滅させてはいけないということもあるが、実際の問題は感情の問題なのである。

人間は不思議なもので、犬や猫を殺すのは非常に嫌で、一方で生まれようという望みのない子牛を沢山生ませて殺して食べても平気でいられる。これはおかしな話で、何故これが許されて人間に近いという感じを持っている鯨は殺してはいけないのか。どうも生命というものは尊いという論理はないようで、感じの問題であるように思われる。日本人も肉食の量が増え、高血圧のような成人病が増えているが、肉食を元来いけないことだとはいわない。生命を尊いといっている人間が肉食をしているわけで、矛盾を生じていることになる。

その解決方法だが、キリスト教的見地から見れば堕胎はいけないことで、アメリカでは堕胎をする病院に対する反対運動は激しいし、共和党も堕胎は絶対反対である。堕胎の経口薬に関しても輸入反対運動が起った。とにかく彼らが言っていることは誰にでもわかるわけである。わかるということは、屠殺場を実際に見た人は一生肉など食べたくないと言うが、それと同じで、堕胎病院を見た人は赤ん坊が抵抗しているようで、本当に人殺しだと実感するそうである。したがって堕胎絶対反対論者は、卵子と精子が一緒になった瞬間から生命は生まれると考えるわけである。

しかし生命をすべて肯定すると人口が非常に増加し、社会が成り立たなくなる。カトリック教に対する反対意見としてこのようなことがよく言われるが、人口増加の解決方法はない。だから生命自身を肯定するのではいけないのではないかという感じが出てくる。

仏教は、一方では生命は苦しみにつながっており望ましいものではないと言っている。ところが、他方では死にかけた人を助ける、苦しんでいる人を助けるということはよいことであると言う。生命がそんなに苦しいものなら初めから生まれないようにした方がよさそうなものだが、そこはそうでもない。仏教ではそれをどう解釈しているかという問題があるが、私はそれを生存というものに関係させたい。すなわち、生まれてきたものは苦しむために生まれてきたようなものだが、生まれる前はあまり増え過ぎないようにし、生まれてきたものは助ける。生命を全面的に肯定するのではなくて、生まれた以上は助けて、健全な、幸福な生活を送れるようにする。そういうことが「生存」ということの意味ではないかと思う。

だから「生存」とは、生きるということが第一で、しかも生きることが楽であるような、qualityの高い生活をさせることであると言える。そうすれば、生命ということでもなく、生残ということでもなく、生きて在るということ、生きて在る以上は助けてやる。これが「生存の理法」ということの意味ではないかと最近考えるようになってきた。

武見先生はこの考えに賛成して下さるかどうかわからないが、恐らく賛成してくださるのではないかと思っている。(文責 編集委員)

＊　＊　＊　＊

講演の後で、会場の参加者との長時間にわたる活発な質疑応答があった。その一部を以下に紹介する。

・生命を4次元の世界でどういうふうにとらえたら良いか。

…時間と空間の両方に関係している。生命は時間に乗っている。そう考えると、生命に対する仏教とキリスト教の考えは矛盾しない。赤ちゃんの誕生時か、精子と卵子の結合時かという、時間の始まりを何処に持っていくかという差だけとなる。違うのは、キリスト教では人間と動物の生命を別にするということで、肉食を合理的に説明するのに役に立つ。それは動物には魂がないからということだが、最近の生物学では、どうも動物にも心があるらしいと言われている。

・生存とは、人間の生存だけでなく、全宇宙的な生命の生存を考えるのではないか。

…そうであるが、生命をあるがままに見るという立場もある。生命は皆何か他のものを傷つけて生きている。生存という意味を何処で境を取るかが問題である。

・人を殺してはいけないといいながら、死刑では人を殺すことを正当化している。しかもその正当化の基準は国により違うであろう。これは大きな矛盾である。

…生命は固定した演繹的価値観に由来する。生存は実践的価値観、多様な行動がある時に行動を決定する価値観による。死刑は後者の価値観による。

・文化が担う歴史とその歴史を担う文化に関わる、人間の感情に関係する生命に対する価値観は、世界的に統一できるのであろうか。

「生存の理法」を考えるとき、客観的、世界的に統一する論理的世界の構築というよりは、

我々自体の立場で、生きているもの、これから生まれるもの、死んでいくものに対して、どのような対応が可能であるかということを、我々自身が納得できるという形でまとめてみるという前段階が必要になるのではないか。また、魂が人間固有のものかどうかという問題を考えるとき、インテリジェンスは人間以外にもあると考えられ、インテレクトは人間以外には使われていない。インテリジェンスは人間のそれと人間以外の動物のそれと本質的に違うのか、あまり本質的な差はないと思われる。そのなかで、生きているものと生まれてくるものと、我々はどう同定ができるのか。

…インテリジェンスは実際の個々の状態において価値決定をする姿勢。価値判断まで含んで行動を決定するもの。動物のほうがそれは発達している。インテレクトは客観的なものに対する知識。インテリジェンスに含まれるものだが、人間が勝手にこれを分けて追及しているために混乱している。最近のセックス観や核家族がその例である。価値と認識を分けたり、善悪を簡単に決めたりするのは、現代の行き過ぎである。

・ジャック・モローの考え方について。

…その後、物理学でも分子生物学でも医学でも、因果律が逆転することがあったり、また客体と主体の循環関係が色々解ってきた。

・彼の言う、宇宙における生命誕生の確率的稀少性について。

…確率が少ないから特別なことが起こったと考えるのは間違いである。カードが一定の順序で並んでいる場合のように、人間が触ったというような或る事情を仮定すれば、そういうことが起こることが多いということであり、確率が多いか少ないかという理論では出てこない。事前確率の問題である。

・自分の生命を考えると全然別の観点から生命を考えなければならないような気がするが、一般論として何故生命に価値を認めなければならないのか。

…生命を大事にする気持は、我々が生まれつき持っている。昔は病気ですぐ死んだりして、希少価値があった。それが段々変わってきて生命は多すぎて困ってきた。生命は必ずしも歓迎するべきものではないということを、現代の世間は教えてくれている。そこに「生存」と言った意味があるであろう。生存には生命の質をより良くするということを含む。

＊　＊　＊　＊

新規加入生存科学研究会員

井内照夫	関口光正	山本　保
原田隆宜	亀田嘉苗	亀山一郎

●生存科学ビューポイント

医療のRationingについて

東京家政大学助教授　関口光正

ここ数年、New England JournalやJAMAなどの雑誌や新刊案内に医療のrationingを議論するものが目につく。rationingは割当てとか配給などと訳され、経済学では、それぞれの財やサービスを個々の家計がどれだけずつ入手し、消費するかを決

定するプロセスを指す。市場価格は所得に応じて財やサービスを振分ける仕組みだし、行列や配給切符によってrationingが行われることもある。

医療のrationing——各個人が必要な医療を受けることができたかどうか、どのような医療をどれだけ受けたか——は所得に応じたrationingではなく、個々の患者の症状に対する医学的判断に基づいて、医師によって決定されるのが特徴になっている。

欧米先進諸国の医療事情を見ると、医学進歩と人口高齢化により、総医療費の膨張が進行し、すでにいくつかの国ではGNPの10%近くを医療に支出するにいたった。国民経済の医療費負担の限界が見えてきたのに、支出額の増加は今後も不可避という危機的状況にある。こうした状況にあっては、医師によるrationingのあり方がこれまでとは違った形で、患者の生死と関わってくる。もちろん、従来から、必要に応じて、医師（またはその集団）が生死を分ける決定を下してきたわけだが、医学の進歩によって医師の手に患者の生死を決する能力が蓄積される一方で、その能力の発揮が財政事情で制限されるといった事態は、英国以外の諸国ではこれまで一般的ではなかった。最近、医療のrationingが論じられるようになった背景はこれだろう。

これには、供給対策と需要対策の二つが考えられる。供給対策としては、医療支出総額つまり供給総量を制限し、その中では、医師によるrationingを働かせようとする方法が英国で現に実施されている。その結果として英国では透析装置がないために死亡する老人の腎臓病患者は毎年千人以上といわれる。

需要対策としては、特定の要件をみたす者のみにある医療を受ける資格を与えようという考え方がある。個人の健康責任を強調し、喫煙者や肥満者には医療を認めない、ライフスタイルによるrationingなどが米国で提案されているが、まだ具体的ではない。

こうしたことが日本で問題となるのはまだ先かもしれないが、医療の国際化を考えれば、我が国だけがこれを避けて通ることはできないと思われる。生死を分けるrationingとなると、どのような方式をとるにせよ、明文化された、社会的合意に基づく基準が要請されるだろう。そこでは、死生観から個人の価値、さらには科学のあり方にいたる、多くの倫理問題が、社会的観点から見直される必要がある。これはまさに、「医学技術という医療資源」の「開発と配分」の課題であって、武見先生が、医学の進歩が将来の医療へあたえる影響に深い関心を払っておられたことが今更ながら思い出されるのである。

●エッセイズ・キュート

「貧　乏」か　ら　は　脱　し　た　？

11月初め、岩手県の２、３の山村をみてまわった。冷害の影響が深刻と予想していったが、もともと米作は難しい地域なので、そのような声はほとんどきかれなかった。むしろ今年は酪農が好況で「牛乳をいくらでも引き取ってくれる」と喜んでいた。

農協の倉庫の脇には、山のようにヘイ・キューブ（草を固めたもの）が積んであり、祭

日というのに配達していた。アメリカからの輸入品である。

最も印象に残ったのは、みんな親切で明るいということだった。

＊　＊　＊　＊

東京に帰ってから数日後に、全く偶然なのだが、30年前ちょうど同じ地域に取材したジャーナリストのAさんに会った。そこで初めて私が訪ねた地域が「日本のチベット」と言われてきた地区であることを知った。

「子供の服装をみても、東京と変りませんよ」というと、彼はびっくりしていた。

それから、彼は30年前の姿を私に話してきかせた。今度は私の驚く番であった。

当時、この地区で、年に一度の大行事は、医療奉仕のため岩手医専の学生が登ってくる日であった。小学校の分校に住民が全員集まり診療を受けたが、多くの人にとっては、これが唯一の医療とのかかわりだった。

その日の夜、人々は山を越えて自分の集落へ帰っていったが、危険な夜道の足元を照らしたのは松明（たいまつ）だった。分校場にも電気はきていなかった。

一般の主食は稗（ひえ）だったが、Aさんらはお客さんというので「米まじりの稗」だったという…。

「そんな面影は何もありませんよ。タクシーを雇うことも出来ましたよ」

「えっ、タクシー」Aさんは絶句した。

しばらくして、「日本が豊かになったかどうかはよく分からないが、貧乏からは脱したのは確かですね」　（O）

維持会員だより

あの武見先生がご闘病中のあるとき、「看護が大事だ」と、もしかしたら書かれたのではなくおっしゃられたのかもしれないが、とにかくそう言われたと看護婦世界で意味深げにうなずきあうことが今でもある。やはり医師のなかの医師でいらっしゃる、との思いがそこにはもちろん込められている。

それで、武見文献の内容分析の報告（9月24日、第41回生存科学研究会）に私はいわば捜し物があって臨んだのだが、274の見出し語のなかには〝看護〟はなかった。取り出されたkey sentencesのなかにもなかったし、いったいにその気配もなかったのである。

報告のあとの討議を聞いていくうちに、当の研究会の先生方はまさにTakemianであるとわかった。Takemianなら当然、武見文献から完璧な生存之理法をとり出そうとするだろう。どこか異質な表現やあいまいなところは整理されてしまったかもしれない。また、key sentencesは定義的なものが多く、およそ事実の記述が見あたらないことも、私の捜し物を隠す結果につながっているかもしれない。後日、そのとき配布された資料を何度も繰りながらそんなふうに思った。

たとえば、「医学に対する要求の加速度的増加は、社会の複雑化と、生存条件のいちじるしい変革による」とあるが、加速度的に増えたその種の要求はほんとうに医学あるいは医療に対する要求なのだろうか。社会の複雑化と生存条件の変革がもたらしたヘルス・ニーズに応えるのに、医学だけが有効なのだろうか。病気よりは健康中心の、医学が主導する

とは限らない多専門協力の、そして脱病院志向のヘルスケアこそが求められるのであって、そこではたぶん、保健教育に代表されるような、導くことを中心とした手段などがひときわ有効なはずである。つまり、ヘルスケア・シフトを起こして新たな要求に応じる守備を敷くべきであろう、といったことを武見先生はどこかで指摘なさっているのではないか、捜したくなる。「医学が生存之理法を明らかにする」と明言されてはいるが。

「生存本能に基づいた健康と生命の欲求はすべてに優先」も、はっきりしすぎている。人間の信仰とか愛、あるいは真理や芸術に先生が目を向けられなかったとは思えない。何よりも自分らしく生きる、というか、精神的に生産する、ことで喜びというエネルギーを得て満たされる人間を見すえずに、生存を論じるわけにはいかないだろう。どこかに上記と矛盾する表現もあるのでは、と思うのである。

Takemianの先生方はいずれ武見による概念のマップを作って生存之理法に迫るとのことだったが、人間性の概念はどんなふうにとり出されるか、いちばん気になる。〝人間性〟という見出し語のもとのsentencesはともかくとして捜し進むと、〝生存〟のもとに「福祉は生存に対してより良い条件を与えること」とあった。さてその〝福祉〟は、と追っていって思うのだが、たとえば、福祉の原形ともいえる人間主義、さらには人間性、ヒトとは別の人間、とさかのぼる道が武見資料には見つかるのではないだろうか。こういう道も丹念に書き込んだマップを何とか見たくなった。

「生命への畏敬が医の本質」とあれば生命への愛を想い、「医学は人間生存のためのサイエンス」「医療は人類の生存にこたえる技術」と読めば、生存のためのアートをイメージする。〝統計〟のもとの一行では統計の位置づけが見えてこなくてもどかしいが、「生存に関する統計」なるものは私の統計についての認識を変えさせるのかもしれない、などなど思う。

というしだいで、捜し物は直接は見つからなかったものの、この資料は結果的にそれが見つかりそうな気にさせてくれるとともに、片隅の一会員がとりあえず看板としてしか見ていなかった「生存之理法」に実体のあることを感じさせてくれるのである。

会員・神奈川県立衛生短期大学教授　小玉香津子

＊　＊　＊　＊

維持会員異動・寄付のご紹介

（昭和63年10月１日～11月30日）

入会

●個人

井内照夫　医師
亀山一郎　岡山県医師会理事
山本　保　上越教育大学教授
亀田嘉苗　亀田産婦人科院長

退会

●個人

方波見康雄

寄付

●個人

高田　勗	60,000円
亀田嘉苗	80,000円
中山昌作	50,000円

ハーバード大学公衆衛生大学院武見講座活動報告

1988年9～11月　　第5回武見フェロー　上原嶋夫

〈武見研究セミナー〉

- Issues in Designing a National Strategy for Aids: An International Perspective／Harvey V. Fineberg
- Aids: An International Perspective／Lincoln C. Chen
- Cost Effectiveness of Testing Blood for HIV Prior to Transfusion／Donald S. Shepard
- Issues in Maternal Mortality／Kelsey Harrison
- Aids: Issues in the Community／Judy Casarella
- Condom Use and Social Marketing／William Dejong
- Madison Avenue and Hollywood: New Avenues for Health Promotion／Jay Winsten

〈武見国際保健フォーラム〉

- Women and Health in Chile／Haydee Lopez
- Tuberculosis Research and Control in Japan: Past Success and Future Prospects／Tadao Shimao

ニュース・オブ・ニュース

研究所日報

11月14日　基本哲理研究：対談「認識と神経科学」

11月17日　財団・基金合同総務委員会

11月24日　第2回システム論的グローバル医療モデル研究会

＊　＊　＊　＊

対談「認識と神経科学」

11月14日(月)午後4時30分から7時まで、研究所会議室において、研究所自主研究の一つ、基本哲理研究の一貫として、ハワイ大学名誉教授、生存研顧問渡辺慧先生と、カリフォルニア工科大学教授小西正一先生とによる対談、「認識と神経科学」が行われた。この研究は対談のシリーズとして数回行われる。内容は、追って一冊の本にまとめて出版される予定である。

＊　＊　＊　＊

財団・基金合同総務委員会

11月17日(木)午後3時から5時迄、研究所会議室において財団と基金との合同総務委員会が開催された。

この会議は、財団・基金の活動について、各総務委員の方々にその状況を説明し、御批判、御意見を頂くために開催されたもので、まず、小平専務から4年間の活動目標と財団・基金の基本構想について説明があった後、各担当者から下記の説明がなされた。

(1)人類生存に関わる地球規模での環境・資源問題の研究という点から、武見太郎博士と強

く共鳴し、深い信頼関係にあった経済学者、レオンチェフ教授(ノーベル経済学賞受賞者)との医療経済モデルの協同研究計画と、氏の蔵書管理への援助資金確保のため、氏を中心とする環太平洋産業連関分析学会(PAPAIOS)の事務局を生存研が引き受けることと、その資金見通しについての説明。

(2)生存科学研究会の各研究分科会の活動、財団の自主研究、特に地域包括医療の実践的研究についての説明。

(3)講演会・会員活動の説明。

(4)武見シンポジウムと武見フェローの将来計画についての説明。

これ等に関連して出席委員から質疑と意見の開陳がなされた。

＊　＊　＊　＊

第2回システム論的グローバル医療モデル研究会

11月24日(木)午後5時から7時まで、大阪大学附属病院講堂において、生存科学研究所研究会自主研究関西分科会としての、第2回システム論的グローバル医療モデル研究会が開催された。

今回は、香川医科大学医療管理学、石川助教授による、「人生80年代へのシステム医療の形成」と題するこれからの医療システムの基本的あり方と、日本プライマリー・ケア学会山口会長による、医療システムのコアたるべきかかりつけ医師としての開業医、特にその機能の実態についての話しを中心に、これからの医療システムのあり方について討議された。

公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース

基金日報

11月4日　医薬品産業組織のあり方研究会準備会

11月8日　第3回武見文献による生存の理法研究分科会

11月12日　館山における地域包括医療研究会

11月19日　表彰助成委員会

11月19日　第4回メディコ・エコノミックス研究分科会

11月19日　第42回生存科学研究会

11月19日　第4回生命倫理の理念と科学的接近研究分科会

11月20日　第3回武見医政の理論と実証研究分科会

11月21日　第4回健康の最小単位としての家庭研究分科会

12月17日　第5回健康投資と地域医療の展開研究分科会

12月19日　第5回健康の最小単位としての家庭研究分科会

＊　＊　＊　＊

地域包括医療研究会実行委員会

10月8日の実行委員会準備会に引き続き、10月20日午後5時30分から研究所会議室において実行委員会が開催された。

メンバーは、梅園忠、大久保利晃、小沢一元、高田　勗、武田　裕、馬場賢一、真弓忠、矢口光子、弓倉藤楠の諸氏。当日は小沢氏代理井上氏、矢口氏代理草野氏が出席。

地域医療と機能連携、地域包括医療構想の検討システムについて等の提出資料と、各メンバーの情報提供にもとづき協議、検討シス

テムを整えること、地域を決めて実践的に研究すること、先ず千葉県安房医師会との協同研究の可能性に向けて努力することが決まった。

＊　＊　＊　＊

医薬品産業組織のあり方研究会

情報化、国際化、高齢化時代における医薬品産業組織についての医学・薬学・経済学・産業界等の各分野の専門家による協同研究として発足する上記の研究会の準備会が、11月4日午後6時から、研究所会議室において開催された。出席者は、熊谷洋研究所副理事長はじめ市橋治雄杏林大学教授、粕谷豊星薬科大学教授、辰野高司東京理科大学教授、佐藤貴一郎帝京技術科学大学助教授、加藤舜二三井物産精密化学品第2部課長、世話人として研究所常務理事の田村貞雄早稲田大学教授、研究所側としては小平専務理事他が出席。

研究の重点は、地域包括医療との関連における医薬品の開発と生産・流通のあり方、産業の公共性と医薬品産業組織のあり方、医薬品開発と生産・流通のグローバル・モデルの形成と実現化への政策的検討等であり、当日は、全体としての研究計画、製薬工業協会との対応、ハーバード大学との協同研究への対応等につき協議された。

＊　＊　＊　＊

館山における地域包括医療研究会

10月20日の実行委員会の協議をふまえて、千葉県安房医師会との協同研究の実現をめざし、11月12日(土)午後、生存研側、小平、田村、向山、真弓、佐藤、落合、尾見、中山の8名が、館山を訪問。安房医師会側では、白幡顧問、本位田会長、遊佐副会長、山田副会長、梅園副会長(生存研メンバー)、西川総務理事、原理事、青木理事、龍崎館山農協専務理事の9名が参加して、館山における地域包括医療研究会を開催した。生存研側からは生存研の総合的研究活動と、従来以上に広範囲な参加者による実践的地域包括医療研究に対する意気込み、体制を説明、安房医師会からは、安房、館山における検診活動を中心とした地域包括医療の実際とその成果、その抱える問題点が説明され、熱心な協議が時間いっぱい活発に行われた。

＊　＊　＊　＊

表彰・助成委員会

11月19日午前10時から、研究所会議室において公益信託武見記念生存科学研究基金の表彰・助成委員会が開催された。基金では、昨年度は武見記念賞を贈呈しているので、今年度は、生存科学研究武見記念奨励賞の受賞者を選ぶ年であるが、準備の都合で推薦依頼の範囲が限定されてしまったためもあり、期限内に推薦者がなかったため、受賞者無しと決まった。

委員会では、研究所が発行を予定している雑誌に研究論文を掲載するなどして、推薦や応募の体制を整えるよう、早急に努力することになった。

＊　＊　＊　＊

第42回生存科学研究会

11月19日午後2時から、経団連会館において第42回生存科学研究会が開催された。会議の冒頭、去る11月9日逝去された茅理事長の御冥福を祈って、全員で黙禱を捧げた。

今回は、生存の質シリーズの「生存について」と題する講演一つに絞り、講演とその後の討論に充分な時間をかけた。講師はハワイ大学名誉教授、理論物理学と情報科学を専門

とされ、国際科学哲学アカデミー副会長を務められた渡辺慧先生。先生は、寺田寅彦博士の門下生で、理化学研究所時代から武見先生と御親交があり、武見先生が医師会で行われたライフサイエンス学会で中心的な役割を果たされた。また生存研の顧問でもあられる。

(講演の内容は本文参照)

告　知　板

第43回生存科学研究会

「生存と武見フェロー—武見フェローの研究報告」

「戦後日本の公衆衛生に与えた占領軍(GHQ)の影響—人口動態統計改革におけるプランニングの重要性」

東京大学医学部国際交流室　丸井英二先生

「職業性健康影響発生に及ぼす直接的・間接的曝露量変動要因の解析」

慶応大学医学部公衆衛生学　大前和幸先生

＊1月28日(土)午後2時より

＊虎ノ門　霞が関ビル東海大学校友会館

(生存科学研究会は毎奇数月の第3土曜日午後を定例としますが、今回は臨時に上記のところで第4土曜日となっています。)

3月は総会になります。

＊　＊　＊　＊

生存科学研究会分科会の予報

1月14日(土)　メディコ・エコノミックス
PM13.00

14日(土)　健康の最小単位としての家庭
PM16.00

25日(火)　武見文献による生存の理法
PM15.00

28日(土)　武見医政の理論と実証
PM17.30

29日(日)　生命倫理の理念と科学的接近
PM13.00 (場所未定)

30日(月)　福祉概念の確認と実践的方法
PM16.00 (予定)

偶数月第3土曜　健康投資と地域医療の展開
PM15.00

＊　＊　＊　＊

武見記念論文・文集ならびに武見資料集予約受付開始

公益信託武見記念生存科学研究基金がかねてから出版準備中であった武見記念論文・文集と武見資料集が「武見太郎の人と学問」と冠する一冊の合本として、丸善㈱から発行のはこびとなりました。生存科学研究会会員、研究所維持会員へは特別価格で頒付いたしますので、御希望の方は研究所までお申し込みください。

特別価格6,000円 (定価18,000円)

＊　＊　＊　＊

訃報

当研究所設立以来の理事長　茅　誠司先生が11月9日に　また理事の一人として　ご尽力下さっていた東京大学工学部教授古澤健彦先生が　11月28日に亡くなられました
ここに　謹んで　お悔み申し上げます

編集後記

武見太郎先生亡きあとの当財団発足に際して、またその後の募金活動に際して、絶大な指導力と実行力を発揮され、掛け替えのない理事長として関係者一同から尊敬されていた茅誠司先生が11月9日亡くなられました。財団の進むべき方向がやっと具体的に定まり始めた時ではありますが、これからの研究活動に大きな期待を持たれていたに違いありません。

生存科学研究所の創始者武見先生と初代理事長茅先生。偉大な両先生の御指導を頂けた生存科学研究会ならびに生存科学研究所がいかに幸運であったかを、今更ながら考えさせられます。

新年号では、生存科学研究会報告にページを充分割いて、渡辺慧先生のお話しを出来るだけ全部掲載するようにしました。　(N)

ヒューマンサイエンス

科学座標の平行移動が始まった！
——待望のニューパラダイム

全５巻　好評発売中！

東大工学部教授 石井威望　国立小児病院院長 小林登　東大薬学部教授 清水博　東大教養学部助教授 村上陽一郎〈編著〉

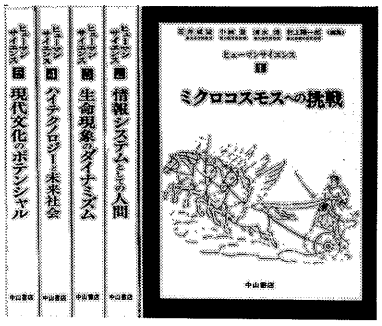
1 寺本英・山口昌哉・渡辺慧他著　情報的世界観と人間，ホロンとしての人間，生命と過程，物質の科学・生命の科学，他　2100円

2 井上和子・香原志勢・佐伯胖他著　高等動物のコミュニケーション，コンピュータビジョン，知識工学と診断システム，他　2100円

3 江口吾朗・大沢文夫・日高敏隆他著　細胞レベルにおける生命，生体とゆらぎ，体の形はどのように決まるか，生命と寿命，他　2400円

4 加藤秀俊・中村桂子・元岡達他著　情報革命と産業社会，第五世代コンピュータのめざすもの，遺伝子工学とバイオソサエティ，他　2200円

5 大島清・東野芳明・森政弘他著　遺伝子と文化の相互進化，科学と宗教，サルの性・ヒトの性，科学と芸術の対話，他　2200円



各A5判　本文9ポ縦組み平均300ページ　美麗カバー付　上製　■詳細内容見本送呈

進歩から幸福へ

ヒューマンサイエンス・シンポジウム全録

第１部　現代人は何を得，何を失っているか　河合隼雄・小林登・加藤秀俊〔討論〕／小此木啓吾〔司会〕
第２部　科学技術の光と影—進歩と幸福のはざまで　柳田邦男・石井威望・中村桂子〔討論〕／村上陽一郎〔司会〕
第３部　いま，なぜヒューマンサイエンスなのか　井上ひさし・清水博・日高敏隆〔討論〕／下河辺淳〔司会〕

A5判　本文230ページ　写・図152葉　ソフトカバー　1000円

〒113　東京都文京区白山１—25—14　☎(03)813-1101(代)　**中山書店**